

帝国主義の侵略反革命を粉碎し全世界の帝国主義を打倒せよ！　スクリーン主義との国際党派闘争を組織し、世界プロレタリア革命・世界プロ独立・共産主義を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

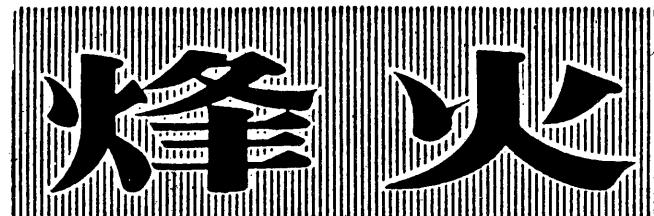
今号の内容

開始された日帝の総攻撃とのたたかいのなかから政治闘争の新たな発展をかちとろう

(87年基調第二部)

..... P2~10

1987年
1月20日
第378号
編集発行人 高木一夫
一部 200円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel(06)371-3706

○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫

○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫



日本資本主義の相対的安定期が終りをつげ、危機の時代が到来しつつある。それは同時に、戦後二度目の巨大な階級的流動期の始まりである。相対的安定期に形成された階級闘争構造が音をたてて崩壊し、危機を迎えた日帝の総攻撃がプロレタリア人民の頭上にうちおろされている。

深まるプロレタリア人民の苦悩と憤激の眼前に、共産主義への新たな希望を真正面から提起しよう。開始されたプロレタリア人民の抵抗戦を総抵抗戦へと発展させ、そのなかから新たな階級闘争の陣形を明日のために全国各地に建設しよう。プロレタリア人民の苦悩と決起を共産主義と結合する武装せる革命の伝導路・労政を全国に建設しよう。

八七年闘争基調第一部で提起した新たな党建設の基調を受け、本論文では八七年の政治闘争の基調を提起する。

●八七年闘争基調

第二部

開始された日帝の総攻撃との たたかいのなかから政治闘争 の新たな発展をかちとろう



国際階級闘争の新たなうねりにこたえよう
(写真はニカラグア革命 1979年7月19日、マナガア市内)

一九七〇年代の二度の石油危機を境に、資本主義の相対的安定期が終わり、世界市場が収縮するとともに、過剰生産恐慌の危機が全世界をおおいはじめた。いくら商品を作っても自国で売りきづくことのできない先進資本主義国のブルジョアジーは、たがいの国内市場を奪いあい、有利な投資先を求めてアジア、アフリカ、ラテンアメリカなど全世界をかけめぐっている。それはこれらの諸国を自国の商品販売市場、資本投下の場所として確保しようとする帝国主義間の市場再分割戦を激化させるとともに、帝国主義の植民地へとますますしばりつけられていく

一九七〇年代の二度の石油危機を境に、資本主義の相対的安定期が終わり、世界市場が収縮するとともに、過剰生産恐慌の危機が全世界をおおいはじめた。いくら商品を作っても自国で売りきづくことのできない先進資本主義国のブルジョアジーは、たがいの国内市場を奪いあい、有利な投資先を求めてアジア、アフリカ、ラテンアメリカなど全世界をかけめぐっている。それはこれらの諸国を自国の商品販売市場、資本投下の場所として確保しようとする帝国主義間の市場再分割戦を激化させるとともに、帝国主義の植民地へとますますしばりつけられていく

ための、また反帝民族解放闘争の鎮圧のための政治的軍事的同盟を、帝国主義各國はますます強化している。

米帝によるニカラグア軍事侵攻策動や、日本による朝鮮半島への軍事介入の準備など、反帝民族解放闘争を鎮圧するための侵略反革命戦争の準備がますます強まっている。そして、植民地国の支配権をめぐる帝国主義戦争の危険も増大していくであろう。

☆☆

さて米帝、西欧帝の深刻な不況を尻目に、日本の世界戦争が全世界で共産主義革命の炎を燃えあがらせることを恐れているからである。だがそのことは、帝国主義戦争の時代の到来が遠ざかることを意味しない。SDI計画や安保・NATOの強化など、労働者国家の軍事的包囲の

産業再編と資本の国際化

たて今日の時代においては、帝国主義の市場再分割の激化が帝国主義間の世界戦争へ直結するわけではない。ブルジョアジーは、帝国主義間の世界戦争が全世界で共産主義革命の炎を燃えあがらせることを恐れているからである。だがそのことは、帝国主義戦争の時代の到来が遠ざかることを意味しない。SDI計画や安保・NATOの強化など、労働者国家の軍事的包囲の

て席巻された。

この風のような輸出攻勢は、全民労協が指摘したごとく、「労使協調を軸に、生産性をため、国際競争力をつけた」ことによって可能になつたのである。いかえれば他帝国主義国をはるかに上回る労働者人民からの搾取と奴隸労働の強化によってはじめて可能になつたのである。

しかしこのような輸出攻勢は、八〇年代に入つて米帝や西欧帝とのあいだで激しい対立を生みだしていく。この数年日帝は、国内市場の解放と輸出自主規制、労働者国家にたいする軍事的包囲網への参加、反帝民族解放闘争の鎮圧にむけた軍事的経済的分担を経済力に見合うだけおこなえなどの要求を他帝国主義からつきつけられてきた。これらは帝国主義間対立のなかで、日帝の優位性を支えてきた条件をひとつづつはぎとつていくものであった。こうして、世界市場の収縮と過剰生産恐慌の危機は日本にも本格的に波及し、「円高不況」といわれるよう、八五年のG5（先進国五か国蔵相会議）以降の急激な「円高、ドル安」によって事態は決定的になつたのである。

国内において強力な国際競争力をもつ第一次産業を育成し、その製品輸出によつて資本の新たな蓄積をはかつていくという日帝の一時代のやりかたは壁につきあたり、これまでのようになってゆけなくなつた。一年間で一ドル二五〇—一六〇円台から、一ドル二一五〇—一六〇円へと変化した「ドル安—円高」は、第二次産業の競争力をそきおとし、より一層の低賃金と労働強化をもつて生産コストを切り下げる、倒産が続出している。これ以上、輸出を強化しようとしても、他帝国主義とのあつれきによつてそれは困難になつてゐる。

日帝はこの局面を開拓するため、①国内産



あらゆる産業で首切り合理化の攻撃が強まり
つつある（三菱高島炭鉱閉山に反対して座りこ
んだ労働の組合員たち）

業構造の大規模な再編、②侵略反革命と新植民地主義支配の強化に踏みだそうとしている。いつたいこれはどのように進んでいくのか。

日帝はいま、大規模な国内産業の再編によりかかっている。中曾根政権はこれを「産業構造調整」と呼び、第三次産業の育成と内需拡大をもつて雇用を確保するといつて、だがこれはまったくのペテンである。

日帝の産業構造の再編は、円高によつて輸出競争力が低下した第二次産業のうち、不況産業のスクランプ化を急速に進めつつ、利潤をあげそのものの国際化として進められている。

こうして国内における第二次産業は、一部の強力な国際競争力をもつ業種と、国内市場で維持できる範囲のみを残す方向に進みつつある。

これに代わり銀行、生命保険、証券、サービス産業などの部門の育成に重点は移つていて、これが国内産業再編の基本的内容である。

このような産業構造の再編は、わが国のプロレタリアートに何をもたらすのか。

金融資本を中心とする大資本は、今後はより一層海外において利潤をあげ資本を蓄積しようとする。だがその資本は国内にはほとんど投下されずに、さらに海外にふりむけられる。金融資本を中心とした大資本は肥え太るのに、それが国内産業の発展や失業の解決にはほとんど結びつかない。不況産業や産業構造の再編に対応できない企業の倒産が相次ぎ、膨大な失業者が生まれだされる。低下した国際競争力を回復するため、すさまじい労働強化が強制され、相対的過剰人口の増大ともあいまって賃金の切り下げ攻撃が吹き荒れる。第三次産業の育成は、主に第二次産業から生みだされる失業者の吸収には役立たず、第三次産業の性格からしてプロレタリアートのなかのパートや臨時職員など、より不安定で低劣な雇用形態を拡大するだけである。

すでに第二次産業を中心に、不況産業のスクランプ化が急速に開始されている。造船では独占資本の撤退が始まり、日立造船ではこの二年間に一万名を越える労働者が解雇され、中小造船業の倒産、関連業界の倒産や大規模な合理化が相次いでいる。また鉄鋼では年間九〇〇〇万吨体制への縮小が進められ、新日鉄、住友金属などでのレイ・オフ、希望退職が開始されてゐる。炭鉱では三菱高島炭鉱の閉山をはじめ、全国炭鉱の半減と一万人削減が実施されている。これは単に不況産業のスクランプ化にとどまらず、時代の花形産業であった自動車産業にもおよんでいる。日産、マツダ、いすゞなどの大量出向が開始され、自動車産業の基礎を支えた中小下請け企業への厳しい合理化や海外生産の要求がおこなわれ、これに対応できない下請

け企業の倒産と激しい淘汰が開始されている。

自動車産業だけでなく輸出産業の機械分野でも同様であり、すでに軒並みの人員削減や合理化がプロレタリアートに襲いかかっている。電機産業もまた同様の事態を迎えるとしている。

こうして、すでに失業率は政府発表でも一・九%（青年男子で三・二%）にのぼり、「失業者二〇〇万人時代」の到来が予想されている。

それは構造的なものであるだけに、失業者は今後増加することはあっても、けつして減少することはない。

利潤を求めて産業構造の再編をおし進め、厳しい帝国主義間競争のなかで肥え太ろうとするブルジョアジーの動向は、わが国のプロレタリアートに失業と生活不安の増大、低賃金と奴隸劳动の強化を不可避にもたらしていくのである。

それは構造的なものであるだけに、失業者は今後増加することはあっても、けつして減少することはない。

新植民地主義支配の強化

このような日帝の動向は、国際的には何をもたらすのか。

日帝は六〇年代から海外への資本投下を本格的に開始してきたが、このかんの事態はこれを決定的に拡大した。日本ブルジョアジーはアメリカ、西欧、アジアへの膨大な資本投下と資本の国際化によって、為替相場の変動がもたらすリスクを回避し、同時に生産コストの切り下げと新市場の開拓をおこない、他帝国主義からの日本資本輸出にたいする非難を回避しようとしている。だがそれは製品輸出をめぐる対立・抗争をこえた、より激しい市場再分割戦と帝国主義間対立をもたらさざるをえない。全世界を戦場にした帝国主義間の抗争に、日帝は本格的に乗りだしていくことになるのである。

この時、いわゆる「新興工業国」といわれる韓国、台湾、シンガポールなどの関係は特にアシア諸国をプロック的に自己の新植民地主義的支配圈に固定化し、市場の確保と労働者人民からの搾取、収奪の強化をおこなうことが、日帝にとってとりわけ大きな比重を占めていく。

この時、いわゆる「新興工業国」といわれる韓国、台湾、シンガポールなどの関係は特にアシア諸国をプロック的に自己の新植民地主義的支配圈に固定化し、市場の確保と労働者人民からの搾取、収奪の強化をおこなうことが、日帝にとってとりわけ大きな比重を占めていく。

う。 民のあいだの矛盾はますます増大していくだろう。 日帝とそれらの国々のプロレタリアート一人で、 いくといふ状態がさらに激しくなるのである。 つてその多くがすいとられ、国外にもちだされ

帝民族解放闘争が激発し、プロレタリア共産主義革命と結合していくをえない根柢を形づくっている。韓国では高まる闘争のただなかで、共産主義革命の旗が公然と掲げられるに至った。

あらゆる領域で攻撃が開始された

危機の時代の到来のなかで、階級闘争を破壊し、プロレタリア人民を侵略革命戦争の準備に総動員していくとする日帝の総攻撃が開始されている。

狙われる戦争への総動員

してきたものは、戦後革命の鎮圧と産別会議の解体、総評の結成をもって成立したいわゆる五年体制であった。このもとでプロレタリアー
トの階級的エネルギーは、総評の戦闘的経済闘争と、社会党を通じた政府にたいする経済闘争（政策・制度要求をめぐる対政府交渉）の圧力としての国会外政治闘争に封じこめられてきた。このような階級闘争構造の成立を可能にしてきたのは「たたかえどれる」といわれた高度成長期、すなわち帝国主義の相対的安定期の存在であった。

民地主主義支配と国内プロレタリアートからの強搾取による膨大な超過利潤をもつて、プロレタリアートの上層部を買収し、多くのプロレタリアートを議会内の政権交代と改良政府の幻想のなかに封じこめてきた。そして他方で官僚・警察・軍隊の強化をおし進め、新左翼や反社共労働者、学生の戦闘的たたかいを孤立させ、暴力的に鎮圧しようとしてきた。

一は、このような階級支配と階級闘争構造を保持するだけの余裕を失っている。プロレタリアート内部の上層と下層への分解が急速に進行し、下層のプロレタリアートを失業の危機と将来生활への不安が急速に襲い始めている。階級矛盾が深まり、プロレタリアートの下層から流動と憤激が拡大していくことは不可避である。

その第一は、プロレタリア人民にたいするイ
デオロギー攻撃の強化である。帝国主義が超過
ゆる領域における攻撃に踏みだした。

斐リピンでも斐リピン共产党と新人民軍はブルジョアジー地主のあいだの矛盾を利用して、解放区建設と都市蜂起の結合による最後の勝利を準備しつつある。日帝は韓国、斐リピンをはじめとした各国労働者人民の闘争の波頭に、ますます厳しく直面せざるをえない。日帝はそれゆえに、各国の軍事政権をより強力にテコ入れし、政治的軍事的にも新植民地主義支配を強化していくことを迫られている。

機能するだけであり、戦争前夜には戦争への総動員機構へと行きつくるものである。

これと連動し日帝は民社、公明、社民連のみならず社会党をも取りこみ、第一保守党化しようとしている。これらの政党はもはやどのような意味でも、プロレタリアートの階級的利益を代表するものではなくなっている。

これらの攻撃によって、プロレタリアートが結集し依拠すべき階級的団結組織を、ブルジョアジーは基礎から破壊しようとしているのである。

三に、有事体制への移行を準備し、治安弾圧の強化を急速に進めている。

「大統領的首相」をとなえた中曾根のもとで、国会の形骸化が進行し、行政権力の肥大化が著しくなった。他方で「危機管理体制の整備」と称して国家安全保障会議が設置され、軍隊・治安警察・官僚機構の統合指揮体制が整備されてきた。これらは有事立法制定策動と結びつき、戦争や支配の危機の煮つまりの時に、実質的な戒厳令をしきつめる準備に他ならない。

このもとで策動されている国家秘密法は、民

族排外主義・國家主義をあおるイデオロギー攻撃であるとともに、「國家の防衛」を掲げた危険きわまりない治安弾圧法である。また天皇制・天皇制イデオロギーの強化も、天皇ためならどんな弾圧も許されるという治安弾圧の支柱としての位置をもつものである。

左翼諸党派にたいする孤立化と解体の攻撃が進められている。「過激派壊滅作戦」と称する新左翼諸党派にたいする実質的治安強圧が急速に強化されている。一ヵ月間にわたって東京が準戒厳令ともいうべき治安体制下におかれた。日帝は本年秋の天皇訪沖時には、沖縄本島と東京をふたたびこのようないきな体制下におこうとしている。また三里塚二

A black and white photograph of a man with dark hair and glasses, wearing a dark suit and tie. He is looking slightly to his left. The background is blurred, showing what appears to be foliage or trees.

全民労協は本年秋に全民労連に移行しようとしている。民間での一大反共ナショナルセンターがスタートを切るわけである。(写真は八二年の全民労協結成大会)



している。民間での一大反共ナショナルセンターがスタートを切るわけである。(写真は二年の全民労協結成大会)

期着工など、軍閥の労働者人民の大たかさを破壊せんとする攻撃が強められている。

危機の時代は右翼ファシズム運動が台頭する時代である。歴史は、共産主義革命の希望を権威をもって提起するプロレタリア前衛党的な革命的実践が不在の時、右翼ファシズム運動が行き場を失ったプロレタリア人民の憤激を吸収してエセ革命運動として成長し、ブルジョアジーの決定的危機の時代には政権を獲得して、ブルジョア独裁支配のもっととも暴力的な形態であるファシズム権力へと転化することを教えている。

わが国では、いままで右翼（ナシズム）運動の大規模な台頭が始まっているわけではない。しかし、山谷における佐藤氏・山岡氏の虐殺、新左翼諸党派の集会や事務所の襲撃、日大をはじめ全国各大学における戦闘的學生運動への襲撃など、右翼勢力は戦闘的労働者人民のたたかいへの反革命敵対を急速に強めている。

燃えひろがる抵抗の闘い

敵の攻撃はあらゆる領域にわたっており、戦争とファンズムの過渡を切りひらく総攻撃と表現してもさしつかえないものである。だがしかし、たゞえ帝国主義的労戦統一が完成化し、戦後階級闘争の構造が崩壊しさつたとしても、それは階級闘争の死を意味しない。

これまでのようやつていけなくなつたプロレタリアートの下層から広範な流動が始まつて、失業や将来生活の不安にたいする憤激が不可避にいたかまざざるをえない。

社会党、民同右派や勤労革新マルの屈服にもかかわらず、国鉄法案が通過した今日においても数万の国鉄労働者が不屈のたたかいをつづけている。国労につづいて国家権力と労働貴族の隼中攻撃を受けはじめた自治労や日教組のなかからも流動が始まっている。産業構造の転換のかで、厳しい首切り合理化と組合つぶしに直面する造船・金属・炭鉱などの労働者の抵抗のなかで、たかいが相次いでいる。

るたたかい、日の丸・君が代の強制や靖国神社公式参拝に反対するたたかい、指紋押捺強制とするたたかい、国家秘密法制定に反対するたたかいなど、日帝の政治攻撃にたいするさまざまの民主主義闘争が大衆的な統一行動として全国各地で広がり始めた。

長期にわたって沈滯してきた学生運動にも、階級的労働運動との結合を希求し共産主義との結合を希求する新たな流動が始まつた。

自然発生的に開始されたこれらの抵抗戦を促進し、日帝の総攻撃にたいする総抵抗戦へと発展させなければならない。どれだけ多くのプロレタリア人民をこの総抵抗戦にひき入れていけば

るのかに、次の時代の階級闘争をどれだけフレタリア人民に広く深く立脚して展望できるかを左右していくであろう。

だがこの総抵抗戦の直接延長上に、わが国における共産主義革命を展望できるわけでは断じてない。プロレタリア人民の自然発生的闘争を組織していくこと、戦後の階級闘争構造の崩壊のなかから新たな階級闘争陣形を建設すること、このたたかいだけが開始された抵抗戦のなかから明日の階級闘争の勝利を切りひらいていくことができる。

この点から見たとき、日共や社会党左派（協会派）はもはやいかなる意味でも階級闘争の領導者たりえない。真正面からの原則的党派闘争をもって、プロレタリア人民内部から彼らの影響を一掃していくためのたたかいが決定的に強化されねばならない。

基盤の中心を、帝国主義の超過利潤によって買収された。プロレタリアートの上層や小ブルジョアジーに移行させた。帝国主義間対立が激化し、日帝の危機の時代が始まるとともに、たとえば日本共が「日本民族の自決権の擁護」などとともに

日帝の危機の時代の始まりとともに、プロレタリア人民と共に共産主義運動の結合を頑強に阻んできた戦後階級闘争の構造が音をたてて崩壊を始めた。開始されたプロレタリア人民の総抵抗戦のなかから、共産主義革命にむけた広範で力強い階級闘争の前進を切りひらきつつある可能性が、革命的プロレタリアートの眼前に広がっている。

どのように政治

どのような政治闘争が必要なのが

でなければならぬ

帝国主義に買収された層に立脚する社共は、これらのプロレタリアート大衆をますます離反させていく。この亀裂のなかに、新たな政治闘争がうちこまれていかねばならない。

第一に、組織されるべき新たな政治闘争は、
経済闘争と政治闘争の分断とたたかい、経済要
求と政治要求、経済闘争と政治闘争をもつとも

原則的に結合させるものでなければならぬ。かつて総評労働運動は、大衆を大規模に政治闘争に動員した。だが総評の政治闘争の基本的性格は、政策・制度要求に関する社会党を通して対政府交渉の圧力（政府にたいする経済闘争）であり、「平和と民主主義」の防衛を掲げた社会党の議会内政策阻止闘争の圧力としての動員にあつた。それは経済闘争と政治闘争を結合させるのではなく、逆に鋭く分離する組合主義的政治闘争に他ならなかつた。

えたようには、彼らが日帝の利害を代弁する排外主義に転落したことはその必然的結果である。また社共はともに、現在の抵抗戦の目的を新

たな階級闘争陣形の建設におくのではなく、戦後帝国主義の相対的安定期の産物の防衛、つまり「戦後平和と民主主義」の防衛や戦後階級闘争構造の防衛においている。しかし、すでにこれらを成立させた経済的条件は危機の時代の到来とともに失われており、これから階級闘争の進路たりえない。この誤りは、とりわけ総評主流派であった社会党左派に色濃い。

日共は社会党左派よりもより左であるかのよ

うにふるまつてゐる。だが断じてそんなことはない。少なくとも次の点では、より厳しい批判が浴びせられねばならない。日共は声高に「自民党的反共宣伝との闘争」を叫ぶが、彼らは実際上はプロレタリア人民にたいして、資本主義への正面からの批判や共産主義の希望提起することを放棄してしまった。彼らが日々おこな

つていることは「日本経済再建の提言」に示されるように、資本主義の改良の幻想をふりまくことである。彼らはブルジョアジーのイデオロギー攻撃に手を貸し、プロレタリア人民を共産主義から切斷する役割を果たしている。

競争が必要なの方

でなければならぬ。帝国主義に買収された層に立脚する社共は、これらのプロレタリアート大衆をますます離反させていく。この亀裂のなかに、新たな政治闘争がうちこまれていかねばならない。

第一に、組織されるべき新たな政治闘争は、経済闘争と政治闘争の分断とたたかい、経済要求と政治要求、経済闘争と政治闘争をもつとも

原則的に結合させるものでなければならぬ。かつて総評労働運動は、大衆を大規模に政治闘争に動員した。だが総評の政治闘争の基本的性格は、政策・制度要求に関する社会党を通して対政府交渉の圧力（政府にたいする経済闘争）であり、「平和と民主主義」の防衛を掲げた社会党の議会内政策阻止闘争の圧力としての動員にあつた。それは経済闘争と政治闘争を結合させるのではなく、逆に鋭く分離する組合主義的政治闘争に他ならなかつた。

プロレタリアートの根本的な経済要求とは、賃金奴隸の廃絶（プロレタリアートの経済的解放）である。すなわち資本主義の打倒と共産主義の要求である。それは、資本主義のもとで絶えず生みだされるプロレタリアートの現実の未発展な経済要求の中に潜在し、内包されてい る。このプロレタリアートの根本的な経済要求は、もちろん一企業のなかで実現できるもので はない。

はなく、全社会的な社会革命によってしか実現できない。そして、それはブルジョア独裁権力を打倒し、プロレタリアートがその手にプロ独裁権力を握りしめるための政治革命を通してのみ可能となる。プロレタリアートの根本的な経済要求と結合する政治要求とは、ブルジョア独裁権力の打倒とプロ独裁権力の樹立である。

したがって、経済闘争と政治闘争の結合とは、プロレタリアートの現実の未発展な経済闘争にたいして、革命的プロレタリアートが断固たる資本主義批判の提起者、共産主義未来の提起者として立ちあらわることであり、ブルジョア独裁権力の打倒とプロ独裁権力の樹立にプロレタリアートを接近させつづけるプロレタリア政治闘争に、広範なプロレタリアートの結集を組織していくことである。

同時にこの帝国主義の危機の時代においては、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争を結合していくことが、プロレタリアート内部の分断と対立を突破していくために決定的に重要なとなる。ブルジョアジーは、雇用問題や労働条件によるプロレタリアート内部の経済的対立をあおり、分断を狙おうとしている。また、各企業間の競争も食うか食われるかという激しいものとなっている。このような時代はプロレタリアートにとって、一人の雇用が確保されれば一人が失業し、また企業間の競争にますますプロレタリアートが巻きこまれて企業ごとに対立させられていく時代である。そればかりか、海外に日本帝資本が資本投下を拡大し侵略を強化することによって、日本と韓国あるいは日本とフィリピンなど、国ごとにプロレタリアートが分断・対立させられ、ついには他のプロレタリアートを殺すための侵略反革命戦争にまで動員されていく時代である。

このよき時代に、プロレタリアートが一企

業内の経済闘争だけをやっていたのでは企業内闘争の限界にぶつかるだけでなく、ブルジョアジーによってバラバラに分断され、たがいに対立させられいかざるをえない。だが侵略戦争の準備に反対していくといふ点では、そしてブルジョア独裁権力を打倒しプロレタリア独裁を樹立し、全世界的に共産主義を実現するといふ点では、企業や国をこえてプロレタリアートの利害は一致し、団結することができる。革命的プロレタリアートは、プロレタリアート内部の分断と孤立を突破するための新たな政治闘争の組織化に全力で踏みださねばならない。

第三に、組織されるべき新たな政治闘争は、共産主義への広範な結集を実現する宣伝・扇動を内包するものでなければならない。民族国家とともにプロレタリアートがあらゆるたたかいに国際主義の宣伝・扇動をもちこみ、国際主義的連帯闘争と結合させていかねばならない。民族国家とともにプロレタリアートが分断・対立させられてい



東京サミット粉碎闘争(86年5月)

る帝国主義の時代、これを突破する国際主義の宣伝・扇動のもつ位置は決定的である。とりわけ危機の時代を迎え、ブルジョアジーからの嵐は、国際主義の宣伝・扇動が強力に組織されなかきり、これまでどうりにはやつていけなくなったプロレタリアートは、戦争とファシズムの側に組織されざるをえない。

またプロレタリアートの現実の苦悩と憤激を、資本主義・帝国主義への批判と共産主義への希望へと発展させるための宣伝・扇動が組織されねばならない。革命的プロレタリアートは、未來を語る予言者になるべきである。資本主義への原則的批判と現代過渡期世界帝国主義批判・アートを解放する希望であることを。

現代日本帝国主義批判をもって語らねばならない。現在が世界的な資本主義から共産主義への過渡にあることを、資本主義・共産主義のものではプロレタリアートの将来生活への不安と現実の苦悩は深まるばかりであることを、そして共産主義のみがこの現実と未来からプロレタリアートを解放する希望であることを。

第五に、以上の新たな政治闘争の組織化を、いま崩壊していく五年体制下の階級闘争構造にかわる新たな階級闘争の陣形の建設と結合させていかなければならぬ。

開始されたプロレタリア人民の抵抗戦を促進するための共闘と統一行動は、できるだけ広範に組織されるべきである。だがそのなかに、明日の階級闘争のための陣形の建設をいささかも溶解させてはならない。今日の条件のもとで、革命的プロレタリアートが自らの責任で建設すべき階級闘争の陣形は、階級的労働運動の地域共闘と大衆的プロレタリア統一戦線の結合体である。この大衆的プロレタリア政治統一戦線は、学生運動など他の被抑圧諸階級層にも開かれ、プロレタリア階級闘争への結合を促進するものでなければならない。

革命的プロレタリアートは、この階級闘争陣形を貫いてプロレタリアート人民の諸決起と共に攻撃にたいして、あらゆる領域で原則的で説得力のある反撃を断固として組織することなしに、プロレタリアートを共産主義に結集させる

ことはできない。

革命的プロレタリアートは、このような宣伝・扇動を抜本的に強化することによって、プロレタリア政治闘争を現実の大衆の世界観・人生観までをも流動・変革するものに發展させ、共産主義革命への広範で力強い結集を組織していかねばならない。

第四に、組織されるべき新たな政治闘争は、プロレタリア階級以外の他の被抑圧諸階級のたたかいを、共産主義革命にむけたプロレタリアートの階級闘争と固く結合するものでなければならない。

日帝の総攻撃が始まると、被抑圧諸階級層人民のたたかいが新しい活性化を示し始めている(前述)。その多くは市民運動の形をとつており、そこにはいまだ階級として組織されていないところの少くないプロレタリアートが参加している。

革命的プロレタリアートは、日帝の総攻撃にたいして広がつていく諸々の民主主義闘争を、たとえその多くが市民運動という形をとるものであっても支持し、より広範で力強いものに発展していくよう促進していかねばならない。

同時に革命的プロレタリアートは、これらの民主主義闘争のなかにはらまれている人民のいまだ不明確な社会変革の願望を、資本主義・帝国主義批判に立脚した明確な共産主義革命への結集へと変革していかねばならない。そして資本主義社会の変革は、いかに広がり、たがいに結びついたとしても抵抗戦としての民主主義闘争をたたかうだけで実現することはできないこと、プロレタリアートの階級闘争の陣形を建設し、共産主義前衛党の建設と結合した先進的プロレタリアートの革命の組織に結合することのみが展望を切りひらくことを明らかにしていかねばならない。

第六に、以上の新たな政治闘争の組織化を、いま崩壊していく五年体制下の階級闘争構造に組織されるべきである。だがそのなかに、明日の階級闘争のための陣形の建設をいささかも溶解させてはならない。今日の条件のもとで、革命的プロレタリアートが自らの責任で建設すべき階級闘争の陣形は、階級的労働運動の地域共闘と大衆的プロレタリア統一戦線の結合体である。この大衆的プロレタリア政治統一戦線は、学生運動など他の被抑圧諸階級層にも開かれ、プロレタリア階級闘争への結合を促進するものでなければならない。

革命的プロレタリアートは、この階級闘争陣形を貫いてプロレタリアート人民の諸決起と共に攻撃にたいして、あらゆる領域で原則的で説得力のある反撃を断固として組織することなしに、プロレタリアートを共産主義に結集させる

蜂起の陣形の建設へと発展させていかねばならない。

第六に、革命的プロレタリアートは、プロレタリアートの政治要求を正面から掲げ、階級闘争の進路を指示する革命的政治闘争を組織しなければならない。われわれは、そのための政治共闘を原則的な政党・活動家組織とのあいだで発展させる決意である。

☆☆

新左翼諸派の後退と転落

このような新たな政治闘争の構築という課題に新左翼諸派、その二つの翼としての現代急進主義党派も右翼日和見主義党派もまったく対応することができず、急速にその影響力を喪失しつつある。

現代急進民主主義党派が、新たな時代の領導者たりえない第一の理由は、共産主義を人民の希望として提起すべきその時に、彼ら自身がその反スターリズムにもっとも深い世界革命と国際共産主義運動への絶望者だからである。そして第二に、彼らの総路線なるものが、政治闘争と経済闘争の結合を組織しえぬ戦闘的経済主義とテロリズムを本性とするものだからである。

彼らは、プロレタリア政治要求をもって、分断されたプロレタリアートの経済闘争を止揚し、また他の被抑圧諸階級層の闘争をプロレタリア階級闘争と結合させることをいささかも組織しない。プロレタリア階級のあれ、農民のあれもともと先鋭化した経済闘争を探しだし、その勝利に日本革命の勝利がかかるといふ恣意的に位置づけ、自らはその経済要求を体現する戦闘団として純化する。そしてこのもとへ、他のいっさいの党派やプロレタリア人民の従属をテロルをもって強制する。いかに戦闘的に見えようとも、これは共産主義運動とは相入れぬ経済主義であり、テロリズムである。

右翼日和見主義党派はどうなのか。彼らは日帝の総攻撃にたいするさまざまの民主主義闘争を「反中曾根」というあいまいなスローガンのもとに結びつけ、促進することを主な活動にしてきた。われわれもまた総抵抗戦の一部であるこれらの民主主義闘争を促進し、たがいに結合させねばだと考える。だがそれは市民運動家や無党派活動家の多くが自力でもやろうとしたことである。プロレタリア前衛党が独自にでもなすべきことは、これらの民主主義闘争のなかに流入している人民の社会変革のばく然とした願望を、明確な共産主義への結集に変革することである。総抵抗戦のための統一戦線に決して溶解させてはならない階級闘争陣形を建設することにある。右翼日和見主義党派はこれを放棄することによって、市民運動の世話役や裏方にまで不可避に転落してきたのである。

われわれは、過ぐる八六年、新たなプロレタリア政治闘争の総戦に踏みだしてきた。

烽火

五・四東京サミット粉碎闘争において、われわれはプロレタリア行動委(準)の同志とともに革命的政治共闘の部隊を登場させ、戒厳体制下の五・四闘争全体を領導した。プロレタリア国際主義を復権し、三里塚闘争の分裂以降のわが国新左翼内党派闘争の否定的現状を突破し、闘争を組織しようという呼びかけは、大きな注目を集め、日大(銀ヘル)や京大全学共同行動委をはじめとした戦闘的学生、労働者活動家の結集を実現した。

また、秋以降、国家秘密法粉碎闘争と、京都を中心とした天皇在位六〇年奉祝地方式典・パレード粉碎闘争を全力で組織してきた。とりわけ国家秘密法粉碎闘争では、一一・一二四集会を成功させた「国家秘密法を許さない全関西実行委」を階級的労働運動、学生運動、市民運動団体と弁護士、文化人の結集による大実行委として登場させた。これを背景としつつ、各地方において新たな階級闘争の陣形を建設するためのたたかいが開始された。

(補) 労働運動再建の課題

このような新しい政治闘争の組織化と結びつけて、労働運動の再建がかちとられなければならない。詳しくは機会をあらためて提起するが、ここでは①現下の労働運動の再編をどうとらえるか②総評解体局面での誤った立場③労働運動再建のために何が必要か——以上三点についての基本的観点を述べることとしたい。

戦闘的総評が敗北し、全民労協・産業報国会化路線がそれによって代わろうとしている、かたしてそなうのだろうか。現下の労働運動にたいする攻撃は、かつて総評が経験した大規模な第一組合による分裂攻撃とは根本的に異なる。かつての第一組合攻撃は、日本資本主義の復興過程における、基本的には個別資本による攻撃であり、総評の戦闘的経済主義にたいする経済主義の枠内での、戦闘的組合主義者はいう。はたしてそなうのだろうか。現下の労働運動にたいする攻撃は、かつて総評が経験した大規模な第一組合による分裂攻撃とは根本的に異なる。かつての第一組合攻撃は、日本資本主義の復興過程における、基本的には個別資本による攻撃であり、総評の戦闘的経済主義にたいする経済主義の枠内での、

強力に総評を牛耳ってきた部分こそがその推進者なのである。

この攻撃に直面し、あらゆる口実をもつけて発生する左翼小児病は、共産主義者の名に汚す。しかしながら、意味で総評を防衛しようとする試みも敗北である。全民労協・産報が国新左翼内党派闘争の否定的現状を突破し、闘争を組織しようという呼びかけは、大きな注目を集め、日大(銀ヘル)や京大全学共同行動委をはじめとした戦闘的学生、労働者活動家の結集を実現した。

また、秋以降、国家秘密法粉碎闘争と、京都を中心とした天皇在位六〇年奉祝地方式典・パレード粉碎闘争を全力で組織してきた。とりわけ国家秘密法粉碎闘争では、一一・一二四集会を成功させた「国家秘密法を許さない全関西実行委」を階級的労働運動、学生運動、市民運動団体と弁護士、文化人の結集による大実行委として登場させた。これを背景としつつ、各地方において新たな階級闘争の陣形を建設するためのたたかいが開始された。

(補) 労働運動再建の課題

この攻撃に直面し、あらゆる口実をもつけて発生する左翼小児病は、共産主義者の名に汚す。しかしながら、意味で総評を防衛しようとする試みも敗北である。全民労協・産報が国新左翼内党派闘争の否定的現状を突破し、闘争を組織しようという呼びかけは、大きな注目を集め、日大(銀ヘル)や京大全学共同行動委をはじめとした戦闘的学生、労働者活動家の結集を実現した。

その時代、日帝の危機の時代における総資本の政治的攻撃である。経済主義内の戦術の硬軟が問題なのではなく、労働運動そのものの解体と労働組合の産報化が攻撃の目的なのである。総評はこの政治攻撃に手をあげて合流している。

全民労協・産報化路線に総評が敗北したのではない。総評路線の根底にある経済主義が、自己帝国主義の危機に対応して发展したものが産報化路線であることを認めなければならない。全民労協・産報化路線は経済主義労組運動と決して異質なものではなく、それは労働貴族層の帝国主義的経済要求であり、帝国主義的政治要求なのであり、もともと総評的な、そしてもともと



政治闘争に広範な労働者を組織することが労働運動再建にとつてきわめて重要な課題

りその運動である」。プロレタリアートはこのるつばのなかで、たたかいの勝利と敗北の経験を通し、自己をますます階級としてうち鍛え、

ブルジョアジーと資本主義の批判者へと前進する、その最初の経験をもつのである。

第二にそれは、大衆の経済要求と政治要求を、経済闘争と政治闘争を、首尾一貫して結合させつづける党の指導として開始されねばならない。

総評はみずから経済主義ゆえに、結局のところ経済要求と政治要求を分離させ、経済闘争から政治闘争を鋭く分離させてきた。彼らの政治闘争とは政府にたいする経済要求、その代弁者のための議会選挙にあつた。そればかりではない。総評路線は、自己の内部から労組の枠をこえて決起するプロレタリアートの政治行動を援助するどころか、激しく抑止し弾圧さえしてきたのである。

抵抗戦に立ちあがった労働者を、ふたたびこの経済主義、組合主義に敗北させてはならない。すべての共産主義者は、プロレタリアートの経済要求とその闘争を彼らの政治要求に結合させ、精力をかたむけて彼らにプロレタリアートの階級的政治要求を提起しつづけ、政治闘争へいざ

抗戦に立ちあがった労働者を、ふたたびこの経済主義、組合主義に敗北させてはならない。すべての共産主義者は、プロレタリアートの経済要求とその闘争を彼らの政治要求に結合させ、精力をかたむけて彼らにプロレタリアートの階級的政治要求を提起しつづけ、政治闘争へいざ

ないつづける任務につかねばならない。

第三に、各地域、各地方に労働運動の陣形をつくらねばならない。

それは新しい労働組合の日常的な共闘体であり、プロレタリア大衆の政治闘争のための日常的な共闘体であり、総抵抗戦の今日、もっとも有効な抵抗拠点でなければならない。それは次

の反撃戦への陣形を創出する事業のために絶対に必要である。著名な左派活動家のいく人々は、総評に代わるナショナルセンターをつくろうと不思議な努力をつづけている。そうして彼らはたゞこの試みを擬似前衛党づくりの夢想と、かつての総評の再現の夢想に分裂させつづけている。

必要なのはただ一つ、各地域、各地方に階級的労働運動の陣形（労働組合の共闘体と大衆的政治闘争の共闘体、この結合した陣形）のための統一戦線が、すべての共産主義者によって提起され建設されることである。そしてこの陣形を踏まえてはじめて、階級的労働組合の全国代表の討議体とそのもとでのより大規模な統一戦線が、「ナショナルセンターの夢想」にとって代わるのである。

その実践的指針は、まずニカラグアやフィリピンなどの他国の共産主義運動や階級闘争との直接的結合と交流を切りひらくことである。この面の活動は、市民運動や国際組織をもつ右翼日和見主義党派が先行し、新たなインターの創建をめざす共産主義運動の側が立ち遅れてきた。この状態はせひとも克服されねばならない。

同時に革命的プロレタリアートはこのたたかいを、プロレタリア人民のなかに共産主義への新たな希望を育していくものとして組織しなければならない。わが国においては共産主義への绝望が蔓延しているが、世界的には決してそう

国際連帯闘争

八七年政治闘争における中心課題

4



全斗煥政権打倒、アジア大会反対を掲げて決起した韓国の学生たち。南朝鮮の階級闘争は大きな転換点を迎える（86年9月 ソウルの延世大）

その第一は、他国の中級闘争にたいする国際主義的連帶闘争を全力で組織することにある。プロレタリア国際主義が復権されねばならない。社共の排外主義への転落と現代急進民主主義の反スターフ国主義を粉碎し、復権すべき国際主義として、これへの国際帝国主義とりわけ自由帝国主義による反革命介入、侵略反革命にたいして徹底してたたかうことを内実とするものである。

革命的プロレタリアートはこの基準を指導基準として、国際階級闘争から切断されているわが国プロレタリア人民の現状を根本的に変革する国際主義的連帶闘争を組織しなければならぬ

ではない。新植民地主義支配のもとにあらる諸国を中心に、共産主義との結合を希求する新たな階級闘争のうねりが強まり、ニカラグアやフィリピンをはじめとして新たな共産主義運動の前進が始まっている。革命的プロレタリアートは他国の共産主義運動・階級闘争との結合と交流にできるだけ広範な人民を組織し、共産主義への希望をうちこんでいかねばならない。

また日帝の新植民地主義支配下にある諸国に階級闘争への連帶戦を、現代日本帝国主義批判と結合させて強化しなければならない。わが国プロレタリア人民を排外主義から解き放つて、そのため、この闘争は決定的に重要である。

そのとき、次のような新たな事態をふまえておかねばならない。このかん少くないわが国プロレタリア人民が、日帝の最大植民地である韓国を日本経済にとって脅威となる新興工業国として見始めている。それは日帝資本が韓国に膨大な資本投下をおこない、生産拠点を移行し、韓国プロレタリアートの奴隸労働によって作られた強力な国際競争力をもつ商品を、日本をはじめ世界市場へ大量に送りだしてきたことを背景にするものである。すでに少くない中小の日本企業にとって、韓国企業との競争に勝つことが死活の問題になっている。こうして日本の独占資本による韓国プロレタリア人民からのすさまじい搾取・収奪はおおい隠された今まで、危機が深まれば深まるほど、わが国のプロレタリアートのなかに韓国と韓国プロレタリア人民への反撥が蓄積され、歴史的な朝鮮人・韓国人への民族的差別と結びつい、一挙に排外主義に組織される条件が成熟してきている。

このようなかで、革命的プロレタリアートがひとにぎりの意識的総抵抗戦にとどまらず、広範なプロレタリアート人民を排外主義から解き放ち、日帝支配下諸国との階級闘争への連帶に組織しようとするならば、血債論でこれら諸国の人々の闘争への態度を迫つたり、日帝による軍事独裁政権へのテコ入れを告発するだけでは決定的に不充分である。現代日本帝国主義批判をもつとも科学的に、わが国と日帝支配下諸国のプロレタリアートが分断・対立させら

れている構造を説明しきり、自らの解放のためにもこの分断と対立を突破しなければならないという確信を、プロレタリアートのなかに育てていかねばならない。

そして革命的プロレタリアートはこれらの国際連帯闘争を、明日のための階級闘争陣形を強化するたかいと結合させて組織しなければならない。全国各地に建設すべき陣形の階級闘争力を、国内プロレタリア人民のためだけでなく、他国の階級闘争への連帶にその最初の段階からふりむけていくことが求められている。カンパ運動であり、抗議行動であれ、できるだけ広範なプロレタリア人民を国際連帯闘争に組織し、国境をこえたプロレタリアートの国際的統一行動の発展が追求されねばならない。

八七年は、米帝によるニカラグア革命への反革命的介入と軍事侵攻策動が強まり、フィリピン「二月革命」以降の流動が新しい段階を迎える。韓国プロレタリア人民と日米帝・全斗煥独裁政権との対立が先鋭化するなど、巨大な国際的流動が予測される年である。全力で国際連帯闘争の組織化に踏みだそう。

国家秘密法 粉碎闘争

八七年の第二の中心的政治課題は、国家秘密法粉碎闘争の組織化にある。

すでに何度も明らかにしてきたように、国家秘密法は改憲をも射程に入れた有事体制作りの重要な攻撃であり、プロレタリア人民を民族排外主義に組織し、階級闘争と共産主義前衛党建設を孤立・解体しようとする危険性わまりないものである。

一月に再開される通常国会への国家秘密法（防衛秘密法）再上程がほぼ確実視される状況を迎えて、ふたたび戦前の暗黒の時代が来るのではないかという人民の不安が広がり、社共のみならず弁護士会、ペンクラブ、出版関係者、文化人、市民運動など全人民的な国家秘密法反対運動が高まり始めている。

革命的プロレタリアートは、広範なプロレタリア人民をプロレタリア政治要求に結びつけ、全国各地にプロレタリア政治闘争の新たな陣形を建設していくための八七年最大の政治課題として、国家秘密法粉碎闘争を組織しなければならない。

だがいち早く階級的労働運動や戦闘的学生運動、市民運動の広範な結集で結成された「国家秘密法を許さない全関西実行委」の運動を除いては、革命的プロレタリアートの側からの組織化が決定的に立ち遅れている。反対運動の多くは社共や市民運動主導のものであり、また社共・総評会での動員以外には、プロレタリアート

の大衆的政治決起の組織化も決定的に立ち遅れている。

このような現状をふまえて、国家秘密法粉碎闘争の基本的方向を次のように提起する。

プロレタリア人民の広範な国家秘密法反対運動を促進・発展させるための各地方における統一戦線を、できるだけ広範なものとして組織しなければならない。とりわけ、ブルジョアジーの激しい首切り合理化や組合つぶしに直面する労働者大衆の結集を拡大しなければならない。

全関西実行委は、二月一五日に大阪中の島公会堂で大集会を組織し、社会党・総評会の運動や市民運動、弁護士会などの連携を強化し、今春の通常国会終盤には、さらに広範な統一行動を追求しようとしている。われわれは、国家秘密法闘争を全人民的な抵抗運動へ発展させるために、この方向を支持し促進する。

同時にこの反対運動の内部で社共への批判戦を組織し、広範な大衆をプロレタリア政治要求へ接近させていくため、プロレタリア政治闘争を強力につくりだしていかねばならない。他のスパイから国家を守る必要性を承認したうえで「国民主権の防衛」をとなえる社共は、この戦争とファシズム準備の時代にあっては、日帝の民族排外主義扇動に屈服し、プロレタリア人民のたたかいを共産主義革命とは決して結びつかぬ「戦後平和と民主主義の防衛」におじとどめるものである。革命的プロレタリアートはこのような社共から大衆を分岐させ、民族排外主義とたたかい国際主義に結集することが、

「戦後平和と民主主義の防衛」にとどまらず日帝打倒と共に産主義革命に結集することが、あらゆる治安弾圧から階級闘争と前衛党を防衛し発展させることができ、いまこそ必要だという確信をおし広げていかねばならない。

そして、全人民的な国家秘密法反対運動を促進するための統一戦線の形成に決して溶解させることなく、全国各地に大衆的なプロレタリア政治闘争の陣形を建設しなければならない。國家秘密法に反対する抵抗戦線は、全関西実も含めて、それ自身がプロレタリア政治闘争の陣形になるわけではない。階級的労働運動の地域共同闘争を基礎に、活動家組織、学生団体、市民運動を含む大衆的プロレタリア政治統一戦線を、一級闘争の陣形として、国家秘密法闘争の高揚のなかから建設・強化しなければならない。

天皇訪冲 阻止闘争

八七年の第三の中心的政治課題は、沖縄闘争の組織化にある。国際帝国主義の危機の深まりと国際階級闘争の前進のなかで、日米帝国主義

のアジアにたいする戦略拠点である沖縄基地の重要性はますます増大し、沖縄基地は侵略反革命前線基地として日々稼動している。

戦争とファシズム準備に奔走する日帝は、こ

の八七年、基地の永久固定化と戦争への沖縄人の動員にむけた一大攻撃をうちおろしている。それは実質的な土地接收に他ならず、「戦争のために一坪たりとも土地を渡さない」と宣言してきた反戦地主を解体する攻撃である。

八七年攻撃の他方の、そして最大の軸は天皇訪冲策動である。日帝は沖縄人民の反天皇感情の格段の強さによって戦後四二年間にわたって阻まれてきた天皇訪冲を、一〇月沖縄國体を理由に強行しようとしている。沖縄國体と天皇訪冲の狙いは次の点にある。

①天皇の沖縄戦における戦争責任を清算し、沖縄人民のなかに根強い反戦平和意識と反天皇感情を解体することである。「國体」＝天皇制護持」のための捨て石戦として位置づけられた沖縄戦は、沖縄人民にたいして筆舌につくしがたい犠牲を強いた。日帝は天皇訪冲によってこれらの歴史を葬り去り、沖縄人民をぎまん的に慰撫し、逆に沖縄戦や天皇の言動を正当化することによって、沖縄戦の体験が絶えず今日の軍事基地の強化や戦争準備にたいするたたかいと結びつく構造を解体せんとしている。

②国体の開催と天皇の出席を利用して、日帝はこれまでさまざまな抵抗によって困難をきわめてきた日の丸・君が代の強制や、自衛隊の社會的認知を強権的におしすすめ、侵略反革命戦争準備への屈服を沖縄人民に強制しようとしている。

③さらに国家権力、右翼ファシストを総動員した威儀体制のもとで、天皇来沖賛否の「踏み



軍用地強制使用許すな!の沖縄労働者のデモ

「絵」を沖縄のあらゆる社会組織・勢力に迫り、来沖阻止のいっさいの政治決起の制圧をもって、沖縄人民に受けつがれてきた戦闘性を奪い、沖縄階級闘争の変質をはかるとしている。このような沖縄八七年攻撃にたいして、「本土」の社共はまったく闘争を放棄している。他方、新左翼諸党派のなかのいくつかや無党派活動家の一部には、政治過程主義的に「天皇訪冲阻止決戦」をぶちあげ、沖縄と「本土」の階級闘争の結合の発展に責任を負おうとしない傾向が存在している。われわれはこれらに反対し、次のように八七年沖縄闘争の基本方向を提起する。

それはまず八七年攻撃とのたたかいを、沖縄と「本土」を貫くプロレタリア政治闘争として組織することにある。

日帝は八七年攻撃をもって沖縄基地の永久固定化と即戦体制強化をはかり、沖縄人民を侵略反革命戦争へふたたび動員しようとしている。そしてその主要な矛先は、朝鮮・アジアの反帝民族解放闘争にむけられている。このような沖縄でこそ、日帝の戦争とファシズム攻撃と対決し、朝鮮・アジアの階級闘争との国際連帯を掲げた政治闘争が組織されなければならない。そして「平和で豊かな沖縄」を「日本の繁栄」によって実現するという、社会排外主義の道を選択した沖縄社共との本格的分歧が組織されねばならない。

他方「本土」における「沖縄問題はもう解決された」という風潮をうち破つて、再度プロレタリア人民の階級的な沖縄闘争への決起が実現されねばならない。朝鮮・アジアの反帝民族解放闘争と直接対峙する沖縄侵略反革命前線基地との闘争は、「本土」における反戦闘争を国際主義的連帯と自国帝国主義打倒へと発展させていくためにもますます重要な課題となっている。また八七年攻撃との闘争を、沖縄における将来のための新たな階級闘争の陣形を建設していくたかいで組織しなければならない。

中曾根政権はついに彼らの懸念で、一%枠を二三四億円突破した。一月下旬に再開される通常国会で、P)比一%枠の突破に着手した。昨年十一月三〇日、中曾根政権は本年度政府予算案を決定し、軍事費については三兆五一七四億円(前年度比五・一%)、一七三九億円増)を計上した。これにより予算案での軍事費は対GNP比一・〇〇四%とな

軍事費一%枠突破を許すな

しかしこの数年間の国際・国内情勢の変化、そして軍用地二〇年強制使用攻撃との闘争や日本・君が代の強制との闘争のなかから、沖縄階級闘争は新しい運動を始めた。それは次の点に特徴的である。(1)沖縄人民は、フィリピンや韓国たたかいとの国際連帯を内包する反戦反基地闘争を、沖縄における大衆的政治闘争を中心としたものから、プロレタリアートを中心としたものへと移行してきた。(2)沖縄における大衆的政治闘争の主体が一時期の農漁民心課題へとたたびおしあげ始めた。(3)帝國主義的心にするものへと移行してきた。日帝のますます強化される攻撃と帝国主義的労戦統一が沖縄にも波及し始め、左派労働者のなかにこれへの危機感が高まり、この数年のうちに予測される沖縄労働運動の大流動に備えねばならないという意識が高まってきた。これらは沖縄階級闘争の新たな前進の萌芽である。

日帝のますます強化される攻撃と帝國主義的労戦統一の波及は、この数年のうちに、これまでのようになり、県労協の存在を前提にして左派労組・労働者のたたかいの発展を展望してきた時代にとどめをさすであろう。この時代の到来に備えて、いま生みだされている沖縄階級闘争の前進の萌芽を、新たな階級闘争の前進させていかねばならない。まず何よりも、左派労組・労働者を軸とする大衆的なプロレタリア政治闘争の陣形が建設されねばならない。

三里塚闘争

八七年の中心的政治課題の第四は、三里塚二期着工攻撃との闘争である。われわれは、三月初頭、重大な局面を迎えた三里塚闘争の組織化について全面的な提起をおこなう予定である。

以上の課題を確認し、八七年の政治闘争の発展とともにたたかいとろう。

してきた民社は論外にしても、社共は国を守る最低限の額にとどめて、もまた戦後政治の防衛、平和国家の防衛という誤った立場から弱々しい反対の声をあげているにすぎない。

社共の基本的立場は、「防衛費」は国を守る最低限の額にとどめて、福祉や教育に金をまわせといふものである。プロレタリアートの立場は「戦後政治の総決算」の一環である。帝國主義の軍事費そのものを認めない、その際限のない拡大には、自国帝國主義打倒、国際連帯の観点から絶対に許さないというものでなければならぬ。

それにたいして「一%枠には根拠がない」と右の側から主張しつづけ全力をあげてうち破れ!

七二年沖縄返還によって一挙に広大な日帝本国階級闘争の戦場にひき入れられた反社共左派勢力は、日帝の直接支配が開始され、「本土」系列化された社共が急速に排外主義に転落するなかで、これに对抗するためのよりどころを歴史的な沖縄と「本土」関係のところ返しから、沖縄民族主義に求めるという傾向に陥った。それは六〇年代後半、復帰運動の分解のなかから、ベトナム反帝民族解放闘争との国際連帯や米軍基地撤去などのプロレタリア的政策要求を掲げたときには、いたんの後退であり混迷であった。

しかしこの数年間の国際・国内情勢の変化、そして軍用地二〇年強制使用攻撃との闘争や日本の丸・君が代の強制との闘争のなかから、沖縄階級闘争は新しい運動を始めた。それは次の点に特徴的である。(1)沖縄人民は、フィリピンや韓国たたかいとの国際連帯を内包する反戦反基地闘争を、沖縄における大衆的政治闘争を中心としたものから、プロレタリアートを中心としたものへと移行してきた。(2)沖縄における大衆的政治闘争の主体が一時期の農漁民心課題へとたたびおしあげ始めた。(3)帝國主義的心にするものへと移行してきた。日帝のますます強化される攻撃と帝國主義的労戦統一が沖縄にも波及し始め、左派労働者のなかにこれへの危機感が高まり、この数年のうちに予測される沖縄労働運動の大流動に備えねばならないという意識が高まってきた。これらは沖縄階級闘争の新たな前進の萌芽である。

日帝のますます強化される攻撃と帝國主義的労戦統一の波及は、この数年のうちに、これまでのようになり、県労協の存在を前提にして左派労組・労働者を軸とする大衆的なプロレタリア政治闘争の陣形が建設されねばならない。

最後に、八七年沖縄闘争の全過程を通して、沖縄と「本土」階級闘争の結合を発展させ、沖縄における共産主義前衛党の建設を前進させなければならない。

「本土」における新左翼党派の多くは、沖縄と「本土」階級闘争の結合は、まず何よりも沖縄と「本土」のプロレタリアートが今日共通に掲げるべきプロレタリア政治要求をもつて組織されねばならないと確信する。それはプロレタリア国際主義と結合した、日帝の侵略と反革命戦争とファシズムの準備との闘争である。

同時に沖縄と「本土」階級闘争の結合は、ひとにぎりの活動家間のそれではなく、沖縄と「本土」のそれぞれにおける明日の階級闘争の陣形を建設するたたかいそのものの結合として反対する。

われわれは異なる歴史的発展過程をたどつた。沖縄と「本土」のプロレタリアートが今日共通に掲げるべきプロレタリア政治要求をもつて組織されねばならないと確信する。それはプロレタリア国際主義と結合した、日帝の侵略と反革命戦争とファシズムの準備との闘争である。

同時に沖縄と「本土」階級闘争の結合は、ひとにぎりの活動家間のそれではなく、沖縄と「本土」のそれぞれにおける明日の階級闘争の陣形を建設するたたかいそのものの結合として反対する。